

優秀賞 福岡県 伊賀崎 望 様 (高校生)

「年金」という言葉を聞いても私にはいまいち近しく感じられずにいた。「いた」という過去形なのは、私が知らないところで私の大切な人達が年金で支えられてきて今があると知ったからだ。それは母の友人でもあり私の友人でもあるエミ（仮名）だ。

エミは母の学生時代の後輩で、今でも親しい付き合いがある。いつでも全力で遊んでくれて、誕生日やクリスマス、私や兄達の卒入学を自分のことのように喜び祝ってくれる人である。小さい頃、クリスマスにエミから送られてくるB5サイズの大きなチョコレートや組み立て式のお菓子の家が本当に楽しみでクリスマスの時期になると「今年は何をくれるの？」と聞いてエミを困惑させるほどだった。

だがいつからだったか、突然エミサンタからの贈り物が途切れた。エミが体調不良で地元に戻った、と聞いてからエミが入院したという話を聞くまでそんなに長くなかった。子供だったのでお見舞いに行くことも叶わず、ただエミが元気になることを祈った。退院後我が家に一度だけ遊びに来てくれた。明るさや優しさはそのままだったが、体型の変化や長時間歩くことが難しいなど、薬の副作用と闘病の痕跡が残っていた。

それまではよく私とも電話で話をしていたが、主に母とだけ電話をすることが増えた。私もエミと話したくて様子を見に行ったりしたが、母の表情から今私が入っていった良い話ではないということは子供心に感じていた。

それから数年後、気がつけばまたエミサンタからのプレゼントが届くようになっていた。そしてまた以前にも増して明るくなったエミと電話でも話すようになっていた。私が今回のエッセイを書くにあたって、周りに年金を受給している人がいないから、よく分からないんだよね、とエミに愚痴をこぼしたところ「え、私のことのんのに話してないと？」と母に聞いていた。お金の話だから…と母は言葉を濁すとエミは明るく、でもふざけることなく

「エミはね、障害年金をもらって、今の生活が出来るとよ。本当にね、年金をちゃんと納めるとって良かったよ。」

と真っすぐな声で言った。私が電話に参加できなかったあの頃、エミは病気に加えて歩行の困難さから昔の膝の怪我が悪化し、家の中での歩行がやっとの状態になっていたそうだ。そ

の時にご両親や訪問看護師、相談員等々と話し合い障害年金を受け取れるように手続きを進めていたそうだ。その間母に電話で話していたことは

「仕事ができなくて収入が無いのが怖い。」

「親も年金生活なのに親に負担をかけるのが申し訳ない。」

「もしこれで申請が通らなかったらこれからどうやって生きていこう。」

そんな不安を母に毎晩涙と共に吐き出していたという。あったねそんなこと、とスピーカー通話の前で母もしみじみ話していた。

「年金受給が認定されたとき、大泣きして電話してきたね。これで親に迷惑かけずに済むし、私まだ生きていける、ってわんわん泣いてたよね。本当に良かったよ。」

エミは元々医療関係で主任まで務めていた人だ。ばりばりに仕事をしている人から仕事を奪い、体の自由を奪い、お金も奪い、生きる気力も奪っていってしまう、それが病気であり突然の事故や怪我である。そしてそれはいつ何時襲ってくるか分からない。

私は、年金はずっと定年退職したおじいちゃんおばあちゃんの生活を支える為のお金だと思っていた。しかし、エミが障害年金を受給し始めたのは三十代後半だ。エミ本人も

「まさかこんなに早く自分が年金をもらうとは全く考えとらんかった。」

と話していた。そして同時に

「のんの、働くようになったらね、ちゃんと年金納めりいね。働きよるときはただでさえ給料少ないのに、何でこがん納めんばいかんとかって思いよったけど、働いとるときに国民年金も厚生年金も納めとって良かったって心から思う。」

エミのその話を聞いて、今までどこか他人事だと思っていた年金が、国民全員に着けられた救命胴衣のように私は思えた。本当なら作動しない方が良い。だが本当に身動きがとれなくなったときに支えてくれる、生かしてくれる。生きる希望と可能性を与えてくれる。

エミは、まだ足や病気の治りは十分ではないが、在宅のウェブライターとして仕事もできるようになっている。世間からは色々と言われがちな年金制度だが、またいつか医療現場に戻れたら…と希望を見せるエミの声を聞くと、間違いなく必要な制度であると思う。あと数年すると私も年金を納め、働く立場になる。そのときには私もしっかり年金も納め、大きなA3サイズぐらいの板チョコをエミにプレゼントしたいと思う。